

研究報告

人々はイタコに何を求めるのか(3)

——創造されるイタコイメージとイタコの実態——

What do People Expect from *Itako* (Japanese Shamans)? (III)
Invented Images and the Realities of *Itako*

原 英子*
Eiko HARA

Keywords: *the images of old women, possessed by dead people's spirits, blind shamans and non-blind shamans*

高齢女性バサマのイメージ、口寄せ、巫者の視覚障がいの有無

はじめに

東北地方には口寄せにより、死者の語りをきく巫者が存在する。イタコは宗教学、民俗学、文化人類学、精神医学、心理学等から関心がよせられてきたが、そこではイタコを描いた文芸作品が研究対象とされることは少なかった。文芸にはどのようなイタコイメージが描かれているのだろうか。それは実態とどのように違うのだろうか。こうした点に注目し、人々がイタコに何を求めているのかについてみていきたい。

1 青森表象としてのイタコ・カミサマ: 畑澤聖悟の創作活動

(1) 「もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら」

2012年8月、第36回全国高等学校総合文化祭が富山県でおこなわれた。その演劇部門で、イタコが登場する演劇「もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら」を演じた青森県立青森中央高等学校が最優秀賞を獲得した。全国2千100校が参加し、地方ブロックなどから選ばれた12校が8月10日から12日にかけて、富山市の県民会館に集まり、「演劇甲子園」ともいわれるこの全国大会で熱演を繰り広げた¹。その結果、イタコが登場するこの劇が最優秀賞に選ばれたのである。2012年総合文化祭演劇部門へ参加した高校生の様子は、2012年9月29日に、NHKのEテレ「青春舞台2012」で放送された。その

なかでこの最優秀賞の演劇はノーカットで放送された²。

この演劇を作った畑澤聖悟(1964年-)は今回で3度、同高校を最優秀賞へ導いた名顧問である。畑澤はイタコを題材に選んだ理由を、青森からの演劇であること、青森メッセージであることを伝えるためだといっている(原2012: 61)³。

青森県立青森中央高等学校演劇部の「もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら」は、2011年の東日本大震災で被災した地域をめぐる、被災地応援公演を繰り返しおこなった。演劇内容は、高校野球の弱小チームが、イタコを監督とすることで、投手に戦前の大投手のホトケをおろし、甲子園の地方大会を勝ち進んでいく。しかし決勝戦の途中でホトケがぬけてしまい、甲子園にはいけなかったという話を、高校生の高校生活を舞台におもしろおかしく描いている。主人公はホトケの依り代となる投手で、震災で母親や野球部のチームメイトを亡くし、青森県の高校へ転入してきた高校生という設定。演劇の背景に東日本大震災が描かれる。野球部監督はイタコの老婆。イタコ役の生徒は高齢女性をイメージして、腰を曲げ、手を後ろに組み歩いている。弱小チームでも投手に戦前の大投手が憑依することで、試合を勝ち進む。その技術をもつイタコは劇で要となる存在である。そしてイタコは、最後に震災で亡くなった人々を口寄せし、死者と生者を結びつける役割を果たす(原2012)。

(2) 「県立戦隊アオモレンジャー」

脚本を書いた顧問の畑澤聖悟は、この「もしイタ」以前にもイタコを青森表象とした作品を創作している。1990年代後半、日本各地にご当地ヒーロー(ローカル・ヒーロー)が出現した。1997年には青森でもつくられた。畑澤は青森放送のラジオ番組『金曜ワラッター!』のなかで、「県立戦隊アオモレンジャー」の脚本・演出を手がけ、リンゴレッド、イカブルー、シャコイエロー、ホタテピンク、イタコブラックというローカルヒーローを登場させた。イタコブラックは下北にあり、普段はイタコ

³ イタコは秋田・青森・岩手に分布しているが、一般にメディアが取り上げることが多い恐山がある青森イメージが強い。

* 国際文化学科

¹ 北海道、東北、中部日本、近畿、中国、四国、九州の各ブロックが1校、関東ブロックから2校、その他、上演団体の基準が定められており、全部で12高校が参加する。(「第58回全国高等学校(富山大会)、第58回全国高等学校演劇指導者講習会、第36回全国高等学校総合文化祭演劇部門参加要項」よりウェブサイト「全国高総文祭とやま2012」)

(<http://www.soubun2012.tym.ed.jp/festival/theater/>)

² 筆者は2011年の東北地方の応援公演を3回観劇したが、全国高等学校総合文化祭はテレビでの視聴である。

を本業とする陸奥みき。イタコブラックに変身し、口寄せなどで相手を改心させる技をもつ。「バサマ」という愛称でよばれていたようだ⁴。バサマとは方言で婆さまのこと。高齢女性に対して使用する。

(3)「カミサマの恋」

畑澤はほかにも劇団民芸に「カミサマの恋」という作品を書き下ろしている。津軽にはイタコとは別にカミサマとよばれる巫者がいる。1990年代、木村藤子が登場し、「青森の神様」として、巫者としてのカミサマが青森に在ることを全国に広く知らせたが、そのカミサマの話である⁵。従来、青森の人はイタコとカミサマを区別してきた⁶。イタコとカミサマがどう違うのか、朝日新聞には次のように記してある。「カミサマは、霊を自らに降ろすイタコとは異なり、守護神と対話しながら相談者に助言を授ける」者⁷。そうした「カミサマこと道子のもとに、嫁姑問題や息子の受験、結婚相手探しなど、悩みを抱えた人物が頻りに訪れる」のである(朝日新聞夕刊2011年9月29日)。2012年、劇団民芸は、九州、中国地方を中心に、演劇をおこなった⁸。内容は、カミサマとして巫者をする遠藤道子は、かつて銀次郎を引き取り、息子として育てていた。その銀次郎が28年ぶりに帰ってきて頼みごとを持ちかってくる。そこにかつての婚約者を見るという劇である⁹。畑澤によると、道子が本当に見えているのか、それとも彼女の演技なのかは明らかにされておらず、そ

⁴ 畑澤が開くサイトによれば、1998年に平成9年度地方民間放送協同制作評議会「ざらっと全国大捜査線」で最優秀賞受賞。99年にも平成11年度日本民間放送連盟賞ラジオ娯楽番組部門最優秀賞受賞(『県立戦隊アオモレンジャーfirst』)。石森章太郎の『秘密戦隊ゴレンジャー』のパロディーだという。

(<http://www.nabegen.com/profile.html>、

<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~aomo/>、<http://d.hatena.ne.jp/keyword/>「県立戦隊アオモレンジャー」より参照 2012年12月8日閲覧)

⁵ 木村藤子は、1990年、地元のイベント会場からいなくなった蛇の出現場所と時間をいいて、話題となる。その著書『「気づき」の幸せ』(小学館)は35万部のベストセラーとなった(木村2008:112)。「青森の神様」と呼ばれ、青森の巫者であるカミサマの存在が全国にひろまった。木村はその後も、『幸せの絆』(主婦と生活社)『幸せの風が吹いてくる』(主婦と生活社)などのベストセラーを書いている。

⁶ 桜井徳太郎は、津軽地方では行者・オガミヤ(拝み屋)・祈禱師などを総称してカミサマとよび、そのうちもつとも典型的なカミサマはゴミンズであるといっている(桜井1970:299-300)。

⁷ 民俗学や宗教学ではイタコとカミサマの区別について論じてきた。特に両者の成巫過程の違いは大きく、職能についても、イタコでイメージされるホトケオロシ、口寄せはおこなわないとするカミサマは多い。身体的にはイタコは女性で、視覚に障害をもっている(池上1987:28、31)。こうした区別については後述する。

⁸ 「劇団民芸 カミサマの恋」2012年12月8日参照

(<http://www.gekidanmingei.co.jp/2011kamisama.html>)。

⁹ 「劇団民芸」2012年12月8日参照

(<http://www.gekidanmingei.co.jp/2011kamisama.html>)。

朝日新聞夕刊2011年9月29日 文化芸能「主演の奈良岡朋子、なじみの津軽弁を披露」参照。

の点が口寄せをおこなうイタコと差異があるという¹⁰。

カミサマ役の奈良岡は、戦時中弘前に疎開し、そこで女学校に通っていたから津軽弁を使うことができるので、その方言をつかっていたの演劇だという(朝日新聞2011)。また畑澤によると、道子は80歳を想定しているという¹¹。

畑澤聖悟が描くイタコやカミサマは、いずれも青森を背景としている。しかも彼女たちは、亡くなった人の霊などかかわることができる高齢の女性として描かれているのである。

2 憑依イメージの拡大と「イタコ」という名称の使用

「イタコ」は、カミオロシやホトケオロシをおこなう女性の巫者で、青森県および秋田、岩手県にかけては「イタコ」という名称でよばれていたが、山形などでは「オナカマ」、福島などでは「ワカ」などと呼ばれていた。それが「イタコ」という名称だけが他の名称と違い、文芸などさまざまな方面で使用されている。そこでは、死者の霊を憑依させたり、未来を予言する神秘的巫者という特徴で描き出されることが多い。

(1)内田康夫の推理小説『恐山殺人事件』(1988 kosiado blue books)

自宅マンションで、変死体で発見された音楽教師杉山博之。その祖母サキは恐山付近に住むイタコで、孫の死を予言し「北から来る男に気をつけろ」と言っていた。はじめ病死とされていた杉山だが、サキの主張で殺人事件であることがわかる(内田1988:17)。やがて音楽教室を経営していた秋田県角館出身の高川伸男も殺される。ルポライター浅見光彦は東北地方を舞台に、女性関係をめぐる過去のトラブルを明らかにしながら事件の謎を解いていくという推理小説である。

この小説でイタコの説明がある。イタコとは「口寄せ巫女」のことだという。そして「「口寄せ」というのは、死んだ人の魂・霊魂を自分の身に取り憑かせて、死者の身内の者に死者の言葉を語ってきかせることだ」(内田1988:11)と記述している。

また実際のイタコとは違い、小説ではイタコは血筋をもとに、代々イタコの出る家系があるとする(内田1988:12、42)。そうした家系の杉山家には代々伝わる紫水晶があると述べている(内田1988:39)。

小説でイタコが霊の口寄せをする「おぼば」であること、予言をする不思議な力をもつ者として描かれていることに注目したい。その神秘性をあげるため、イタコの血筋や紫水晶を出していると思われる。

(2)中森明夫『アナーキー・イン・ザ・JP』(2010 新潮社)

この小説では「イタコおぼば」が物語を始めるためのキーパーソンとして登場する。主人公は17歳の少年シンジ。パンクに

¹⁰ 畑澤聖悟氏にご教示いただきました。

¹¹ 畑澤聖悟氏にご教示いただきました。

はまり、三十年前に死んだ真のパンクスといわれるシド・ヴィジャスに会おうとオーラの館に行く。そこで死んだ人と話をさせてくれるという「イタコおぼば」に「降霊」を依頼する。しかし手違いで少年の身体のなかにアナーキスト大杉栄（1885-1923年）が宿ってしまう。主人公は、しばしば大杉栄に身体を乗っ取られる。そうしたときはシンジの意識がなくなっている。気付くと大杉がシンジの身体を使用して様々なことをおこなっているのである。しかし反対に大杉の意識をとおして彼の時代に飛んでいき大杉の身体のなかに宿ることもある。現代の少年と過去の大杉栄の時代を往復しながら物語が展開していく。

主人公の少年シンジと大杉栄がひとつの頭のなかで同居する。この物語の設定を可能にするために登場するのが「イタコおぼば」である。「イタコおぼば」は恐山などのイタコイメージと西洋的な占いのイメージを合体させた「おぼば」として登場する。

「降霊」をおこなっている場所は「オーラの館」という洋館。ここでは「口寄せ」でも「ホトケオロシ」でもなく「降霊」がおこなわれる。「イタコおぼば」が使用する道具は西洋的な水晶玉で、クレオパトラのような派手な衣装を着ている。その身体つきは、白髪で顔に深いシワが刻まれた百歳にも見える老人だが、二つの目だけが異様な光を帯びている（中森2010:25）。小説では特に視覚障がいやうかがいさせる記述はみあたらない（中森2010:24-30）。恐山などのイタコは、依頼者に呼び出したい人の名前と命日を書いてもらうが、小説では呼び出したい人の名前と肩書きを書いてもらっている。その肩書きに、呼び出してもらうシドのことを、彼の最後の言葉をとって「ナンバーワン・アナーキスト」と書いてしまう。それで大杉栄が降りて来てしまったのである。主人公の頭の中に宿る二人と言う物語の始まりをつくるためには、イタコイメージを基にイタコと少し違う「イタコおぼば」の登場が必要だったのである。

3 イタコの「バサマ」イメージ

これまでみたいずれの作品にもイタコやカミサマは、「バサマ（婆さま）」というイメージが共通している。ところでこの「バサマ」はいったい何歳くらいなのであろうか。昭和30年代、つまり1950年代後半の状況を探ってみよう。

現在のイタコは高齢女性が多い¹²。それは半世紀ほどもイタコが一人前と認められるオオルシやカミツケといわれる儀式がほとんどの地域で行われていないことも影響している。かつて10代でイタコに弟子入りした者も、半世紀をすぎ高齢となっている。先に演劇や小説でみてきたようにイタコは「バサマ」、つまり高齢女性でイメージされている。この点、実際はどうだったのであろうか。何歳だと「バサマ」イメージになるのかは、平均年齢など時代によって変わる可能性がある。このことに気をつけながら考えてみよう。

¹² 筆者が調査している青森県、岩手県のイタコ（オカミサン）の状況では高齢者が多い。

精神神経科学の中村民男は1955年から58年にかけて、青森県から岩手県の一部にかけて249人のイタコとその類似者（カミサマ123人、その他5人）の調査をおこなった¹³。最も多かった年代は、50代の93人。ついで60代64人、40代36人、70代26人、80代9人であった（中村1961:875）。30代以下は、全体の1割もいない。一方、50代以上は全体の4分の3を占めていたことがわかる。

ところで調査がおこなわれた1950年代後半、「バサマ」とみられる女性の年齢は何歳くらいであったのだろうか。1955年の日本人の平均寿命は、男性63.60歳、女性67.75歳であった¹⁴。当時の初婚年齢は、夫26.6歳、妻23.8歳である¹⁵。つまり平均的な年齢で結婚した夫婦には40代後半から50代以降には孫がいる可能性が高かったと推測される。そう考えると、全体の4分の3が50代以上を占めるイタコは、やはり「バサマ」のイメージが強かったと考えられる。

この推測を裏付ける文章がある。宗教民俗学の佐藤正順は1958年に、旧仙台領地域の68人の巫者について次のように書いている。「……この人達の多くは、五、六十才の婆さんで、中に三十才の人が一人いる」（佐藤1958:35 下線：原）。また宗教学の石津照壘は1969年の論文で、面接した巫者のうち、25歳以下は3人で「多くのミコは老人である」と具体的な年齢は示していないが、「老人」という言葉を使っている（石津1969:18 下線：原）。これらのことから、少なくとも1950年代後半、つまり昭和30年代は、50代以上の女性は「バサマ」イメージでとらえられており、イタコの4分の3以上は、当時「バサマ」とみられる相応の年齢であったことがわかる。

また興味を引かれるのは、先の畑澤聖悟の作品、2012年に西日本各地で上演された「カミサマの恋」で、カミサマの年齢を80歳に設定していることである。女性の平均寿命が86歳¹⁶に近い今日、イタコやカミサマのイメージ年齢もあがっている。「バサマ」年齢は社会状況によって相応に変わっていくようである。

4 イタコの性別

「バサマ」イメージでとらえられるイタコは、その呼称から高齢であることと同時に女性であることが示される。それではイタコに男性はいないのだろうか。

¹³ その他には、占いのみおこなうもの2名、日蓮宗の僧侶でホトケオロシ、カミオロシをおこなうもの1名。客に頼まれて仏をおがむもの1名、カミサマかイタコか不明の者1名となっている（中村1961:873）。

¹⁴ 厚生労働省「平均余命の年次推移」2012年12月11日閲覧（<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life10/sankou02.htm>）

¹⁵ 内閣府共生社会政策のウェブサイト「少子化対策 平均初婚年齢の推移」参照、2012年12月11日閲覧（<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23webhonpen/hw/furoku08-05.html>）

¹⁶ 厚生労働省「平均余命の年次推移」から。平成22年女性は85.90歳。男性79.44歳。2012年12月11日閲覧（<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life11/dl/life11-14.pdf>）

1950年代後半に青森県から岩手県北部にかけての249人の巫者を調査した中村民男の論文には、イタコを称する女性121人に対し、男性は0と記されている。一方、カミサマなどの類似宗教者は、女性105人、男性23人となっており、こちらは割合に満たない数ではあるが男性が記録されている(中村1961:875)。イタコは、伝統的に女性になるものとされてきた(たとえば池上1987:29)。それゆえに、小説や演劇などではイタコは「バサマ」として描かれてきたのである。

しかし一方で、数は少ないが男性イタコがいることも報告されてきた。たとえば精神神経科学の懸田克躬らは、1957年に青森県でイタコ136人、カミサマ122人、その他の民間宗教者10人を調査した。そのなかで、男性イタコが弘前市、南津軽郡、下北郡に各1人、全部で3人が報告されている。カミサマの場合16名、その他は2名で、イタコよりは男性の割合が多くなっているが、全体的に女性のほうが男性よりも多い(懸田・渋谷・前田・中村・田島・三井1959:203)。この男性イタコについては石津照璽も報告しており、インタビューされた1人が、もう1人の存在を話している(1969:17)。

こうした男性のイタコは、どのような経緯でイタコになったのだろうか。桜井徳太郎が1970年の論文で報告している。それによると、男性Aは幼少時失明し、その後ゴミソになった¹⁷。イタコと結婚したが妻が死亡したので妻の道具を使って、依頼のある口寄せもおこなうようになり、土地の人から「Aイタコ」

「男イタコ」と呼ばれるようになった。当時、金木町川倉地蔵講のイタコマチにも出かけている。本業のイタコたちからは蔑視されているが、よくあたるとの評判で依頼者があとをたたないという(桜井1970:326-327)。桜井は男イタコの出現は、従来、師匠より習うという成巫パターンを変え、イタコとゴミソ(カミサマ)の境界をあいまいにし、混淆がすすめられるだろうと予測した(桜井1970:327)。

現在の男性イタコ、鳴海秀雲は「元祖津軽イタコ大師匠」と称している。精神看護学の藤井博英は、保健医療福祉の立場からスピリチュアルケアに取り組み、青森のイタコなどのシャーマニズム文化が、医療と補完関係を築けるのではないかと注目してきた(藤井・山本・大関・角濱・坂江・阿保・出貝・板野・佐藤・樋口・瓦吹・田崎・中村:2002、朝日新聞2010年12月24日「消えゆくイタコ」のなかの「自殺者癒す効果?」)。2011年、日本赤十字秋田看護大学で日本ヒューマンケア科学学会第4回学術集會が開催されたが、藤井はそのときの会長を務め、「元祖津軽イタコ大師匠」鳴海秀雲による講話を催している。鳴海によると、彼は晴眼で、厳しい修行により入巫式を経て独り立ちをしているという。現在鳴海のもとを訪れるのは、ほとんどが青森県外の人で、精神的に悩みを抱えたうつ病、不登校などの人々の相談にのることでカウンセリングの役目を担って

¹⁷ ゴミソは蔑称なので(池上1987:9)、現在はカミサマを使用することが多い。ここでは桜井の表現をそのまま使用した。また、桜井は実名をのせているが、ここでは実名を伏せ、男性Aとした。

いると考えているという。またこの講話において、イタコ祭りのデモンストレーションや口寄せをおこなっている(鳴海2011:29)。鳴海秀雲は、東京などで「イタコセラピー」を称するセミナー活動などをおこない、その活動の一部は、彼に講演や口寄せを頼んだ会社のウェブサイトや関係者のブログに載っている。また、彼の実演はYouTubeなどへ画像が投稿されている。鳴海の活動には、青森を越えた都市部などでの講演や大衆の前でのイタコの儀礼、そうした活動を撮影した者によるウェブサイトへの動画投稿がみられる¹⁸。

イタコが儀礼を大衆の前でおこなうことはこれまでもしばしばあった。たとえば青森県立郷土館では2010年に文化庁「地域文化芸術振興プラン推進事業」として青森のイタコによる「おしら祭文」などの「民俗芸能特別講演」をおこなった¹⁹。しかし鳴海の場合、そうした伝統芸能として儀礼を再現しているのではなく、新たに「イタコセラピー」と称する活動を開始し、ウェブサイトなどにも登場する活動に積極的に関与している。こうした新しい動きは、従来の伝統的な女性のイタコではなく男性イタコから発信されている。桜井が1970年に予言した男性イタコの介入による伝統的形態の変化に注目する必要がある。

5 視覚障がいについて

懸田克躬らの先の論文には、1957年当時、青森県のイタコ137人中、23人17%が開眼者であったと書かれている(懸田・渋谷・前田・中村・田島・三井1959:203)。一般にイタコには視覚障がい者が多いとされているが、開眼、つまり晴眼のイタコとはどういう人たちなのであろうか。

石津照璽の論文に晴眼でありながらイタコになった人たちがいたことが書かれている。石津はミコと書いているのでそのまま記しておく。それによると、東北地方では視覚障がいがあると按摩になるかミコになった。ミコになるには12-3歳から、16-7歳の間がよいが、家の事情で20歳をすぎ弟子入りするものもかなりいる。しかし30歳過ぎての弟子入りはまれだという。晴眼者の場合も年齢は大体同じだが、家計の事情で夫があり、視覚障がいがないにもかかわらずミコになった者がいたという(石津1969:18)。石津の記述で注目されるのは、イタコになると一定の稼ぎが期待できるため、晴眼者でも家計を理由にイタコになる者がいたことである。しかし中村によると晴眼でも5名のうち3名が身体に障がいをもっており、「将来の生活を考えて入巫したと考えられる」ことを記している(中村1961:880-881)。

¹⁸ 「第3回イタコセラピー講演会：鳴海秀雲セミナーズ」
(http://www.seminars.jp/user/seminar_d.php?sCD=13440) 2012年12月14日閲覧

You Tube 「shimotalkさんのチャンネル「イタコ」」
(<http://www.youtube.com/watch?v=A405pSO62Vo>) 2012年12月14日閲覧

¹⁹ 「青森県立郷土館ニュース」2012年12月17日最終確認
(<http://kyodokan.exblog.jp/12357645/>)

盛岡市在住の大正生まれのある女性は、夫の母が視覚障がいをもつイタコだった。彼女によると、イタコの仕事を頼んだ依頼者が家まで送り迎えをし、帰るときは車いっばいの野菜や米などの食料をもって来たといっている。青森と岩手では事情が違うが、共通してイタコになると生活できる稼ぎが期待できたことがうかがえる。そうしたことから、イタコには視覚障がい者が多いが、視覚障がいがなくとも、身体の障がいをもつ者、あるいは家計の事情でイタコになる者が1950年代から60年代末にかけてはみられたようである。反対に懸田らは視覚障がいがありながらもカミサマを称する者が7%いることも報告している（懸田・渋谷・前田・中村・田島・三井1959:202）。視覚障がいの有無は、イタコとカミサマを区別する指標であったがそれに反する者が少数ながらも1950年代にいたことがわかる。

6 イタコとカミサマを区別すること

国立民族学博物館の大森康宏は、1994年に「津軽のカミサマ」という映像を製作した。ここでは工藤タキという晴眼でありながら恐山の夏の大祭で口寄せをするカミサマが取材されている。それから20年。現在は、恐山の夏の大祭や川倉賽の河原地蔵尊の例大祭にやってくるイタコの人数は極端に少なくなった。そのイタコたちの中に、晴眼のイタコもいる。恐山にやってくるある晴眼のイタコの夫は、朝から晩まで何日も口寄せをおこなう妻をよくサポートしている。彼はいった。「目が見えるか見えないかは、イタコかどうかという問題にはならない」と。確かに口寄せに来た観光客などは、どちらも様にイタコと呼び、カミサマと区別してはいない。夏の大祭などでは、恐山には「イタコの口寄せ」という看板だけがでている。

桜井徳太郎はイタコとゴミソなどのカミサマとの区別意識には地域差があることを指摘した。イタコとカミサマはいずれも南津軽地方が本場で、シャーマン²⁰本来の典型的な形態を崩さずオーソドックスな立場を堅持している。「したがって、この地区の民間では、決して両者を混同することはなく、両者の形態的機能的相違は明瞭に認知されている。ところが周辺地区へいくにつれて、その弁別は曖昧となる。イタコやゴミソじしんも、ときによってはその本心を秘匿して他者に偽装する」のだという（桜井1970:309）。一方、周辺である新開地方の北津軽郡や西津軽郡ではイタコやカミサマを意識して区別することに関心を示さない。シャーマン的呪法的宗教行為をする者が重要なのだという（桜井1970:310）。ここから桜井は「とくに死霊の憑依を受け、その死霊に代わって死者の心意を口語ることが「口寄せ」であり、この口寄せ巫術をなすうる巫者、つまり口寄せ巫女であることが津軽イタコをもっとも特徴づけている属性だというべきであろう」としている（桜井1970:311）。

恐山の夏の大祭にはイタコの口寄せを求めて全国から多くの人々がやってくる。旅行会社によるツアーで口寄せを期待して

やってくる人も多い。そうした人々にとって恐山で口寄せをしているのがイタコであって、彼女の視力障害の有無やイタコとカミサマの呼称の区別は問題ではない。問題なのはどの人がよく当たるのか。どのくらい待つと自分の番になるのかといった口寄せに関することである。イタコの口寄せも、依頼者が地域の人が地域のイタコに依頼していた時代からツアー等で遠方から来る時代となっている。依頼者は死者の口寄せをしてもらいたいのである。桜井が言うように口寄せをする人がイタコなのである。イタコとカミサマの区別は地域や時代で変化している。

最後に

イタコを描いた現代の演劇や小説をいくつかとりあげながら現在の動きを考察してきた。イタコが登場する映画や小説などは多数存在するので、本稿ではその一部を取り上げてみたに過ぎない。一部ではあるかもしれないが、演劇や小説の中に描かれる現実のイタコとの相違や誇張は、それが描かれた時代的背景をもって描かれているものだと考えられている。何が現実のイタコたちと違い、何が誇張されているのだろうか。そうしたイタコイメージをイメージの創造ととらえ、現実のイタコたちの実態との関係を明らかにするのが本稿の目的であった。

畑澤聖悟は「もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら」や「県立アオモレンジャー」、「カミサマの恋」で、青森を舞台とした演劇であることを伝えるため、イタコやカミサマを使用している。反対に言えば、イタコやカミサマは、すでに「青森」としてのイメージを獲得しているといえよう²¹。

1980年代後半に書かれた内田康夫の『恐山殺人事件』では、神秘的能力にたけ、死霊の口寄せができるイタコの老婆が、殺人事件の予告をした。2010年の中森明夫の小説では、主人公の頭の中に死去した人物を住ませ、二人の頭の中での会話を可能にするために「イタコおばば」の登場が必要であった。

これらに見られるように、第一に小説や演劇ではイタコは「バサマ」として描かれてきた。実際のイタコも、その時代の「バサマ」イメージのある年代の女性たちがイタコのかなりな割合を占めていたことが本稿で確認された。しかし平均寿命が延び、社会的にバサマとよばれる女性の年齢があがると、登場するイタコも年齢があがる。時代的変化が反映されているのである。第二に、従来イタコは女性がイメージされてきた。確かにほとんどが女性であるが、しかしながら少数ではあるが男性イタコも報告されてきた。そうした少数派の男性イタコは、いわゆる「伝統」的イタコイメージから乖離しているが、そうした男性イタコにより、近年、イタコセラピーやウェブサイトを利用した活動など、新しい動きが起こっている。第三に、イタコの視覚障がいについて、演劇や小説では、視覚障がいがあったり、

²¹ イタコの青森イメージについては恐山でのテレビ放送などがイタコのイメージ拡大に大きく作用している。

²⁰ シャーマン、シャーマンの表記は桜井の原文に基づく。

なかったりという状況がみられた。実際のイタコでも視覚障がいがあるイタコが多いが、晴眼者もいることがわかった。反対に晴眼者とされてきたカミサマにも少数だが視覚障がいをもつ者がいることがわかった。視覚障がいの有無は、イタコとカミサマを大きく区分するが、絶対的な指標とはなっていなかった。

桜井も指摘するようにイタコとカミサマの境界はもはや曖昧(桜井1970:327)になっている。従来の形式である師匠について修行する「伝統的」イタコを志望する人が出現することは、もはやほとんど期待できない。イタコ業を営む人も数えるほどになった。その一方で、従来の形式とは異なるが、特定のイタコの師匠をもたずイタコを名乗る巫者が出現しているのである。

イタコを登場させる演劇や小説などの文芸作品は、現在も生産され続けている。現実のイタコを基本的に使いながら、イメージの世界は、「口寄せ」をもとにイタコを発展させてきた。創造されるイタコイメージは現実のイタコからさまざまな発展を見せている。一方、イタコを称する人々の側でも、従来の伝統的形式とは異なる新たな形式の変化もおこしているのである。

【参考文献】

朝日新聞 2010年12月24日

「消えゆくイタコ」内の「自殺者癒す効果？」

朝日新聞夕刊 2011年9月29日

文化芸能「主演の奈良岡朋子、なじみの津軽弁を披露」

池上良正

1987『津軽のカミサマ』動物社

石津照璽

1969「シャマニズムの特質と範型—東北地方における事例—」

(東洋学会編『東洋文化』46-47合併号) pp.1-53

内田康夫

1988『恐山殺人事件』(書き下ろし長編本格推理 廣済堂 kosiado blue books 使用)

懸田克躬・渋谷百合子・前田栄振・中村民男・田島臣子・三井金吾 1959「東北地方におけるシャマニズムの社会精神医学的研究—青森地方におけるシャマンの分布—」(『順天堂医学雑誌』第5巻第3号) pp.199-209

木村藤子

2008『「気づき」の幸せ』(小学館)

発行年不明『幸せの絆』(主婦と生活社)

発行年不明『幸せの風が吹いてくる』(主婦と生活社)

桜井徳太郎

1970「津軽イタコと巫俗—とくにその分布と成巫過程について—」(和歌森太郎編『津軽の民俗』吉川弘文館) pp.297-330

佐藤正順

1958「宮城県北地方のミコ」(『社会と伝承』第2巻第1号)

中村民男

1961「青森県におけるシャマニズムの社会精神医学的研究—イタコと類似者との比較—」(『順天堂医学雑誌』第7巻特別号(II)) pp.872-900

中森明夫

2010『アナーキー・イン・ザ・JP』(新潮社)

鳴海秀雲 2011「講話」

『日本ヒューマンケア科学会誌』4(2) p.29

原英子

2012「人々はイタコに何を求めたのか(2)—東日本大震災と青森鹿野メッセージとしてのイタコ—」(『岩手県立大学盛岡短期大学部 研究論集』第14号) pp.61-64

藤井博英・山本春江・大関信子・角濱春美・坂江千寿子・阿保美樹子・出貝裕子・板野優子・佐藤寧子・樋口日出子・瓦吹綾子・田崎博一・中村恵子

2002「青森のシャマニズム文化と精神保健」(『青森保健大学紀要』4(1)) pp.79-87

<演劇・脚本・映像>

畑澤聖悟作

・「もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら」

・「県立戦隊アオモレンジャー」(青森放送ラジオ番組)

・「カミサマの恋」

大森康宏 1994「津軽のカミサマ」国立民族学博物館制作

<ウェブサイト>

・「全国高総文祭とやま 2012」の「第58回全国高等学校(富山大会)、第58回全国高等学校演劇指導者講習会、第36回全国高等学校総合文化祭演劇部門参加要項」2012年11月20日閲覧 (<http://www.soubun2012.tym.ed.jp/festival/theater/>)

・「渡辺源四郎商店」の「畑澤聖悟略歴」2012年12月8日閲覧 (<http://www.nabegen.com/profile.html>)

・<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~aomo/>、2012年12月8日閲覧

・<http://d.hatena.ne.jp/keyword/>「県立戦隊アオモレンジャー」2012年12月8日閲覧

・「劇団民芸 カミサマの恋」2012年12月8日閲覧

(<http://www.gekidanmingei.co.jp/2011kamisama.html>)

・「厚生労働省」の「平均余命の年次推移」(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life10/sankou02.html>)

2012年12月11日閲覧

・「内閣府共生社会政策」の「少子化対策 平均初婚年齢の推移」(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23webhonpen/ht>

ml/furoku08-05.html) 2012年12月11日閲覧

・「第3回イタコセラピー講演会：鳴海秀雲セミナーズ」

(http://www.seminars.jp/user/seminar_d.php?sCD=13440)

・You Tube 「shimotalk さんのチャンネル「イタコ」」(<http://www.youtube.com/watch?v=A405pSO62Vo>) 2012年12月14日閲覧

・「青森県立郷土館ニュース」2012年12月17日最終確認 (<http://kyodokan.exblog.jp/12357645/>)

【謝辞】

本稿をまとめるにあたり青森県立青森中央高等学校の畑澤聖悟先生にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。